慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉岡金市著『森近運平』： 大逆事件の最もいたましい犠牲者の思想と行動
Sub Title	Kinichi Yoshioka : Morichika Unpei
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1961
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.34, No.6 (1961. 6) ,p.128- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19610615-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ものの未成熟さのためかも知れないが、いずれにせよ、本書の執筆者のほとんどがアメリカのソヴェト研究者であることは記憶されていてよいのではないかと考える。

（中澤精次郎）

吉岡金市著『森近運平』

――大逆事件の最もいたましい犠牲者の思想と行動――

森近運平は、いわゆる大逆事件の犠牲者の一人である。明治天皇暗殺の陰謀をくわだてたというので、明治四三年五月二五日、宮下太吉が信州松本近郊の明科で検挙されてから全國で一、〇〇〇名近くの社會主義者がいっせいに検挙され、結局二六名が法廷に送られた。翌一月一八日に判決があり、二四名が死刑、のこる二名が懲役一一年、同八年の刑を宣告された。死刑を宣告されたもののうち半數の一二名が翌一九日死一等を減ぜられ無期となったが、これら二六名のうち三、四名をのぞく他の大部分の人々はまったく事件と關係なく無罪であることは事件當時から語りつたえられ、敗戰後この方面の研究が自由にされるようになってからそのことが確證されるようになった。森近運平も、まったく事件とは關係のない、いたましい犠牲者の一人であり、明治四四年一月二四日絞首臺上に消えたのである。

著者吉岡金市博士が森近運平に關心をもちはじめたのは、明治四四年春であり、そしてこの「大逆事件の最もいたましい犠牲者――森近運平」の傳記をかかねばならないと思いたったのは、大正一一年春であるという。この傳記をかかねばならないと思ってから、まさに四〇年の月日がながれたわけである。なぜ森近の傳記をかかねばならなかったかの理由について吉岡博士は、森近と博士とは「同郷・同窓・同學という因縁の外に、彼が自然科學と社會科學を統一したすぐれた農業理論家であり、理論と實踐を統一した人道主義的な社會活動家であったというところに、特別の關心を拂っていました」（三六一頁）と説明されているが、この言葉のなかに本書のポイントが端的に示されている。さて、本書は、

序――本書のなりたち
一、大逆事件の歴史的意義
二、大逆事件と森近運平
三、森近運平の生い立ち
四、森近運平の人と事業

五、森近運平の社會主義
六、森近運平の農業理論
七、森近運平の刑死の前後
八、森近運平は生きている
附錄、森近運平獄中書簡
跋――森近運平と筆者との因緣

という順序と内容で構成されている。

森近運平を語ろうとすれば、とうぜん大逆事件にふれなくてはならないが、吉岡博士は「法律的にいって、『かれら(中村註―事件の關係者)が全く無實の罪』でなく、數名のものは明治の刑法にいくらかふれていた」(一二頁)ことをみとめておられる。「大逆事件は、當時の無政府主義者の一部の人々――宮下・管野・新村らの三人にさらに古河を加えて僅か四人の人々が計畫した天皇暗殺の準備計畫をたねに、當時支配者にとってうるさい存在となっていた社會主義者を、一網打盡にやっけようとする軍閥官僚の仕組んだデッチアゲ事件であった」(二四頁)ともいわれておる。まことに科學的な態度で事件をみつめ、正しく評價されたものといえよう。なぜならば、研究者のなかには事件關係者全員が天皇暗殺と無關係であり、全事件がデッチアゲだというものさえすくなからずあるからである。誰と誰が天皇暗殺の準備計畫をし、それがどの程度明治の刑法にふれるかという點と、まったく事件と關係のなかった者すら社會主義者であるがために無實の罪を負わされねばならなかったという點ははっきりさせておかなくてはならない。吉岡博士は「大逆事件には天皇の暗殺と社會主義の大逆殺という二つの質のちがった問題が、重ねられている。しかもこの二つは、階級的性格をもっている。大逆事件は、支配者の側からみれば、絶對主義的な天皇の暗殺事件であり、被支配者の側からみれば、先驅的な社會主義者の大逆殺事件である。それ故に、この事件の階級性をぬきにしては、大逆事件の眞實は解明されえないのである」(一八頁)と事件の性質を明確にされている。

ところで森近運平は、まったく「社會主義者の大逆殺」の犧牲者であった。彼は事件とは何の關係もなかったが、幸德傳次郎、管野須賀子につぐ重要犯人として大逆事件に關係せしめられたのはなぜであったか。事件のおこる數ヵ月前の警察の報告書は森近の動靜について「至極平穩ニシテ何等怪シムヘキ行動ナシ」(二五九頁)と記していたし、そのころ森近は幸德の思想と私生活を批判し、幸德・管野と訣別して鄕里にかえりガラス室園藝に從事していた。宮下より天皇暗殺の計畫がもらされたときも自分には妻子があるからといって、はっきりことわった森近であった。その彼が重要犯人として絞首臺に消えなくてはならなかったのはなぜか。この點につき吉岡

博士はつぎのように説明する。すなわち、天皇暗殺計畫は宮下を中心として管野・新村・古河らのあいだで進行していたが（七一頁）この計畫の推進者「宮下に天皇家の尊敬に値しないことを教えた點にある」（七六頁）のである。森近が天皇家の尊敬するに値しないことを知つたのは久米邦武の名著『日本古代史』によつたのである。しかし森近が宮下にこのことを教えたのは、明治四〇年一二月であるが、宮下が森近に天皇暗殺の決意を告げたのは明治四二年二月であるから、兩者の間には時間的なへだたりがあつて、直接的な關係はなかつた（七六頁）。檢事論告でさえ、森近が天皇暗殺の共同謀議者（正犯）に關係のうすいことをみとめ、彼を從犯の列に加えていたほどであつた。しかし從犯の大多數が死減一等の恩赦に浴したにかかわらず、森近が絞首刑にされた根本の理由は、天皇制のタブーに手をふれて、勞働者の目ざめをうながしたことが、明治天皇及びその忠義な家來たちの心證をいちじるしく害したためといわざるをえない、という神崎清説を吉岡博士は引用して説明している（七六―七頁）。「人民ガ日本ノ皇室ヲ萬世一系ノ天皇デアルト尊信スルハ一種ノ迷信デアル、史家ハ神武天皇ガ大和ノ橿原テ卽位セラレタト書ヒテ居ルガ、當時卽位杯ト言フ觀念ガアツタカ否カハ判ラヌ。神武天皇ハ九州ノ邊隅ヨリ起ツテ長髓彥等ヲ倒シ、其領土ヲ奪ツタノデアルト（宮下ニ―中村註）説明シマシタ。之ハ私ガ久米邦武氏ノ日本古代史ヲ讀ンデ得タ意識ニ自己ノ考エヲ加ヘタ説デス」（二七四頁）と森近は彼の天皇觀を豫審調書で開陳したが、かかる科學的史觀・天皇觀をもちえたのは明治の社會主義者のなかでも限られた二、三のものだけであつた。森近はこの科學的な史觀の持主だつたがゆえに國家權力により虐殺されなければならなかつた。戰前は天皇と天皇制をどうみるかというこの一點の評價によつてその思想と實踐の眞僞のほどを見わけることができた。森近運平は科學的な史觀をもちえたかず少い先驅者の一人として高く評價されてよい、と考える筆者は本書のなかからとくにこの點をとりあげて紹介したわけである。

森近はまた「産業組合は中産以下の實業者を利する主要目的とする」という小作組合論を展開したすぐれた先驅的な農業理論家であつたことも詳細に紹介されており、また幸德傳次郎がどちらかといえば机上の理論家であつたのにたいし、森近は勞働者・農民のなかにはいつていく實踐家であつたことも力説されている。これらの點は、彼の天皇觀とともに森近を評價する場合忘れてはならない點である。

森近が社會主義者になるまでのコースを略述すると、彼は明治一四年一月二〇日岡山縣後月郡高屋町森近嘉三郎の長男として生れ、同三三年三月岡山縣立農學校第一回生を首席で卒業し、同三五年二

月岡山縣廳に勤務し農業行政とくに産業（協同）組合の組織と指導にあたつた。縣廳より派遣され、産業組合の講習會に上京し、ある晩社會主義演說會にとびこみ幸德の熱辯に感激し社會主義へ入つていつた（一四六頁）のである。明治三七年夏、反戰的な「舌禍事件」で同年末日付で縣廳を辭職し、ここに社會主義者森近運平が登場する。

森近は大逆事件のなかで幸德・管野につぐ重要犯人とされていたが、それでは森近とはどういう人物であり、本當はなにをしたか、という點について從來究明されるところすくなかつた。吉岡博士四〇年の努力により先驅者森近運平の全貌が明らかにされたことは同學者一同のよろこびである。

これを機會に、幸德一人の顯彰のかげにかくされて、この面においても「犧牲者」である他の一人びとりの關係者についても一層の研究がすすめられることを期待するものである。

本年一月二四日の森近運平刑死五十周年記念日までに出版するため、急ぎ印刷されたためか正誤表以外のミスプリントがかなり多く目につくこと、また一、二こまかい事實の誤りに氣づくが、それらも本書刊行の偉業に比するととるに足りないともいえよう。（日本文敎出版株式會社　三二〇圓）

（中村勝範）